

効果的な研究協議会の進め方

初級編

後藤 忠

留意点 (あらかじめ協議時間を示し、時間が来たら終了する)

- ① 4、5人のグループで、対面で協議する。
- ② マニュアルの1からグループで協議を進める。(進行は総意に任せ、司会は立てない。)
- ③ 話すことを強要しない。(順番発言は厳禁。結果的に発言0の人がいてもよい。)
- ④ 聴く人は話す人の目を見て、うなずきながら聴く。
- ⑤ 発言内容に対し、反論や否定は一切しない。
- ⑥ 各グループからの協議内容の報告は行わない。
- ⑦ 授業者はグループ間を移動しつつ、求めに応じてグループからの質問や意見に答える。

1 よい教材だったか

- (1) 教材は道徳授業の命！よい教材を選択すると授業は50%成功と言える。
よい教材は、「ねらいに合っている」、「分かりやすい」、「興味関心がもてる」、「臨場感がある」、「うさん臭さがない」。(教師の心に響き、教師が惚れた教材はよい教材だと言える。)
- (2) よい教材にはねらいとする道徳的価値の理解(価値理解、人間理解、他者理解)を深める要素がたっぷり詰まっている。

2 児童の心に届き、心に響く教材提示だったか

- (1) 教材提示に命を懸け、児童の心に届き、心に響く教材提示を行う。
教材提示は「間」が肝である。

1、2ができれば80点の授業！

3 (展開の前段の) 発問は的を射た発問だったか

- (1) 一人の登場人物を追いつけると「ねらいとする道徳的価値の理解」は深まる。(その人物は、迷い、悩み、失敗し、後悔し、奮起するなど人間くさい人物だったか。)
- (2) 教材分析(場面分析と内面分析)に基づき、根拠が明確な発問だったか。
- (3) 主な発問(主発問)は3つまで。(中心発問が1つ、基本発問が2つ)

※中心発問さえ外さなければ、道徳授業になる！

ドンピシャな中心発問を設定すると更に +10点！

参考 望ましくない発問

- ◇ 発問の意図が分からない発問
- ◇ 本時のねらいや指導内容に沿っていない発問
- ◇ 抽象的な言葉の意味や言葉の概念を考えさせる発問
- ◇ どこか、何を問われているのか分からない発問
- ◇ 発達の段階や個人差を考えていない発問

◇ 言葉がよく吟味されていない発問

参考 **安易に用いない方がよい発問**

◇ 「なぜ? どうして?」など理由を問う発問（児童の思考を答え探しに導く）

◇ 「もし、あなただったら…」という発問（道徳授業の特質と役割を損ねる）

4 「話し合い」は効果的だったか

- (1) 話し合いは聴き合い。話す指導より聴く指導に重点を置く。（「人の話は目と耳と心で聴く」、「話し上手より聴き上手になる」）
- (2) 話し合いにふさわしい座席の配置を工夫する。（顔が見える、板書が見える）
（「教材提示のとき」、「グループでの話し合い活動のとき」、「自己の生き方を見つめる学習のとき」、「書く活動のとき」など、それぞれの学習活動にふさわしい座席配置にする。）
- (3) 一人一人が自分の考えをもって話し合いに参加できるよう配慮する。
一人一人が自分の考えをもつまで**待つ!**（挙手した子をすぐ指名するのはNG!）
- (4) 「話し手は聴き手の方を向いて話す」、「聴き人は話し手を見て聴く」指導を徹底する。
- (5) 教師は常に話し手の対角で傾聴する。

5 「書く活動」は効果的だったか

- (1) 書く活動は原則 1 回。（書く活動には時間がかかる。最短でも 5 分は必要。理想は 8 分）
- (2) ワークシートの大きさは、書くことに困り感をもっている児童に合わせ、小さ目がよい。

6 見やすく分かりやすい板書だったか

- (1) キーワードで板書する。（文は黒板が雑然となり、分かりにくい。）
- (2) 板書計画を立てる時は **3** の内面分析を利用する。（板書は授業前にすでに完成しているものでありたい。）

7 授業者の指導への姿勢、身構えは適切であったか

- (1) 授業者も人間として発展途上中。児童と共に自分も高まろうとする態度で授業に臨む。
- (2) 児童の発言を受容的に、共感的に、肯定的に、**待つ、聴く、受け止める**。
- (3) 児童と共に**考える**。
- (4) 児童の考えを整理する。（板書などで）
- (5) 児童の考えを広げる。
- (6) 児童の考えを深める。
- (7) 児童の学習を支援する。
- (8) 児童に**学ぶ**。